福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

De Malo et Vitio

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂田, 登 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8678

悪と悪徳について

De Malo et Vitio

坂　田　　登*

Ego Dominus, et non est alter,
formans lucem et creans tenebras,
faciens pacem et creans malum.

われは主なり他にひとりもなし、
われは光をつくりまた闇を創造す、
われは平和をつくりまた悪を創造す。

Is., 45:6~7

悪（malum）の問題とは言うまでもなく、われわれが現実に生きていくうえで必ず直面せざるを得ない最も大きな問題のひとつである。では悪とはいったいどのようなものなのか。これほどまでにわれわれを悩ませ、翻弄する悪とは決して迷いや妄想といったものではなく、確固たる存在を有する実体（substantia）なのか。しかしキリスト教哲学においてはこの世界の創造者である神は最高善である。では、そのような神がはたして悪をも創造したのか。これはそもそも神の本来の性質に反することではないのか。ならば、悪とは本来無（nihil）でしかないようなものなのか。ここではトマスのテキストに従って悪の本性、および人間が有する悪に向かう習慣あるいは能力としての悪徳（vitium）について考え、それに付け加えて、18世紀のフランスにおいてキリスト教的な悪徳の思想と対立する哲学を唱えたサドの思想についても、比較のために触れておきたい。

トマスはその『悪論（De Malo）』において悪をどのようなものとして考えているのか。まず、悪

*福井大学教育地域科学部社会系教育講座

とは存在する何か「或るもの（aliquid）」なのか。トマスによると、例えば何かが「白い（album）」と言われるとき、「白」の基体（subjectum）となっているものそのものが白いと言われる場合と、「白」という付帯性（accidens）そのものについて白いと言われる場合がある。同様に「悪」についてもその基体に関して悪いと言われる場合即ち「或るもの」が悪いと言われる場合と、その付帯性に関して悪いと言われる場合即ち「或るもの」が悪いのではなく、何らかの個別的善の欠如（privatio alicuius particularis boni）という付帯性に関して言われる場合とがある。つまり、或る実在する人間が悪いと言われる場合、即ちその人間そのものに関して言われる場合と、その人間の有する付帯性即ち性質に関して言われる場合とがある。ここで本来悪そのものといわれるのは基体、「或るもの」としての人間ではなくあくまでその付帯性、性質なのである。人間そのものが悪であるということはあり得ず、あくまでその付帯的性質が悪といわれるのである。[1]

善に対立するものとしての悪とはそもそもどのようなものか。善とは、アリストテレスによれば、欲求されうるもの（appetibile）、欲求の対象となりうるものである。すなわち、すべてのものが欲求するところのものが善なのである。しかるに悪とはそのような善に対立するところのものである。しかし、そのような悪とは何か実在するところの「或るもの」ではありえない。つまりは悪とは存在しないものなのである。[2]なぜそのようなことが言えるのか。

欲求されうるものとは目的としての性格（ratio finis）を有している。ところで、目的の秩序とは動者（agens）の秩序と同様であり、動者がより上位で普遍的なものであればあるほど、その運動の目的もより上位で普遍的なものとなる。すべての動者は何らかの目的即ち善のために運動しているからである。例えば、知事は特定の市民たちの個別的な善を目指すのに対し、総理大臣は国全体の平和というより普遍的な善を目指すのである。しかるに、第一の不動の動者にして普遍的な存在の原因（causa）とはまた同時にすべての善がそれに還元されるところの普遍的な善でもある。彼即ち神こそはすべてのものにとっての第一の原因、第一の動者そして最終目的なのである。それ故、存在する限りのすべてのものはこのような第一原因から存在を与えられて存在しまた運動しているのであり、またすべての存在者は第一原因としての普遍的善を最終的に目指しているのである。そしてそのような普遍的善から存在を与えられているものとは、すべて個別的な善以外の何ものでもありえない。すべてのものは存在する限りにおいて善なるものなのである。それ故、悪とは善に対立するそして善とは異なるものである以上、存在するものではなく、むしろ存在する個別的な善が欠如している状態なのであり、個別的な善に付属する何ものかなのである。例えば、盲目という悪は存在する何か或るものではなく、そこに存在するべき視力という善が欠如している状態なのである。[3]

---

[1] De Malo., q.1., a.1

[2] ibid.

[3] ibid.

また、あらゆるものは自らに適合した傾向性（inclinatio）または欲求（appetitum）を有しており、それらによって欲求されうるものとはみな善の性格（ratio boni）を持つものである。すなわちすべてのものは何らかの善への適合性を有しており、善に対立するところの悪はものの世界において何か或るもの（aliquid in rebus）ではありえないのである。それ故、もし悪がものの世界において存在したとしてもそれは何も欲求せず、欲求されることもなく、動くことも動かされることもないのである。ものの世界においてすべては善を欲求し、善を目指して運動するからである。[4]

さらには、存在そのもの（ipsum esse）こそは欲求されるものという性格を有している。なぜなら、すべてのものは自然本性的（naturaliter）に自らの存在を保存し、破壊的なもの（destructiva）を逃れようとするのであるから、存在そのものこそは、常に欲求されるものとして善なのである。それ故、善に対立するものとしての悪とは存在そのものに対立するものであり、そのようなものは何か存在する或るものではありえないのである。しかし、何らかの個別的善が悪によって欠如させられることによって、悪であるということが付帯するものは何か存在する或るものなのである。[5]

では、存在しない悪、善の欠如としての悪とはどこに見出されるのであろうか。まず、「善」とは三通りの仕方で語られる。一つはものの完全性そのものがそのものの善（善さ）と言われる場合である。例えば、鋭い視力が目の善と言われたり、徳（virtus）がその人間の善と言われたりする場合である。二つめは自らの完全性を備えたものが善であると言われる場合である。例えば、徳のある人間や鋭い視力を持った目が善であると言われる場合である。三つめは基体そのものが完全性への可能態にあることによって善であると言われる場合である。例えば、魂が徳に対して可能態にある、目という実体が鋭い視力に対して可能態にあるというような場合である。そして悪が備えられるべき完全性の欠如であるならば、欠如とは可能態にある存在者においてしかあり得ないことであるから、本性的にそのものが有するべきものを有していないときにそのものは何かを欠如していると言われるのであり、ここに欠如としての悪が見いだされるのである。善とは何らかの完全性であり、それは悪によって損なわれる（欠如させられる）ものなのである。基体と完全性から構成される善きものにおいて、悪によって完全性が取り去られた場合、そこに残された基体は悪しきものと言われるのである。例えば、盲目（caecitas）という悪によって視力（visus）が取り去られた目は悪しき目である。また、純粋な現実態にあり如何なる可能態性も有しないような存在者即ち神においてはいかなる悪も存在しえないのである。[6]

では、このような神によって創造された世界に悪の原因と言えるようなものがはたして存在す

---

[4] ibid.

[5] ibid.

[6] De Malo., q.1., a.2

るのか。そのような世界においてはそもそもいかなる悪も自体的な（per se）原因というものは持たない。自体的な原因を有するものとはその原因そのものによって意図される（intentum、志向される）ものであるが、しかし、その意図を外れて生じたことは自体的な結果ではなく偶然的（per accidens）な結果である。例えば、墓穴を掘っていたら宝物を見つけたというような場合である。そして、悪をなす者は皆何らかの善を意図しながら、偶然的あるいは付帯的な仕方で悪をなしてしまうのである。例えば、姦淫（adulterium）を犯す者は感覚的悦楽（delectatio sensibilis）という善を意図しながら、付帯的あるいは偶然的な仕方で姦淫という悪をなしてしまうのである。ここで理解されることは、姦淫という悪の原因となっているのは付帯的、偶然的な仕方においてではあるが、感覚的悦楽という善なのである。そしてこのようなことはあらゆる悪に関して言うことができるのである。即ち、いかなる悪においてもその原因は偶然的、付帯的な仕方ではあるが善なのである。例えば、中世においては、水の腐敗（corruptio aquae）という悪の原因は能動的な火の力（virtus ignis activa）であると考えられた。（水を熱いところに放置しておくと腐るから。）しかし、ここで火の力によって第一に意図されていることはあくまで質料の中に火の形相を導入することであるが、このことに付随する仕方で水が腐敗させられてしまうのである。[7]

意志を有する存在者においても、これと全く同じではないが、よく似たことが考えられる。感覚的快楽の力が姦淫への意志を動かし、そのような快楽を味わうように仕向けるのである。しかしこのようなことは理性の秩序（ordo rationis）と神の法の秩序（ordo legis divinae）とを排除する道徳的悪（malum morale）なのである。しかし、このような仕方で意志がその外部から快楽への誘惑の圧迫（impressio）を必然的な仕方で受け取るだけというのなら、意志を有する存在者も自然的事物と何ら変わることはないことになる。しかしながら、外部の感覚的なものによって誘惑されるとしても、意志にはそれを受け取ったり拒絶したりする能力がある。それ故、意志が外部からの誘惑を受け取ることによって生じる悪の原因は誘惑するものよりもむしろその圧迫を受け取る意志の側にある。そしてこれらいずれの場合においても、悪の原因は偶然的なものであり、それは欠陥のある善（bonum deficiens）であると言える。偶然的であるというのは意志が何らかの意味で（secundum quid）善ではあるが、単純な悪に関係するようなものに引きずられてしまうからであり、そのような善とは欠陥のある善なのである。つまり、姦淫という行為において目指される肉体的、感覚的快楽とは欠陥のある善即ち悪を内包する善であり、姦夫または姦婦の意志は偶然的にそのような善を選択しそれへと向かってしまうのである。このようなときにはそのような善に何か欠陥がないか前もってよく熟慮（praeconsiderare）しなければならないのである。[8]

ところで、あらゆる事柄についてそれが善か悪かを決定するのは一つの規則（regula）あるいは

---

[7] ibid.

[8] ibid.

尺度（mensura）である。規則と尺度に一致しているものが善であり、そうでないものが悪である。例えば、大工が規則あるいは尺度に従って木をまっすぐに切らなければならないのに、まっすぐに切れなかったとき、それは悪しき切断と言われ、このような悪はその大工が規則と尺度から外れてしまったという欠陥から生じるのである。同様に他の人間の道徳的行為においても、常に理性の規則と神の法とによって行為は規則づけられ、ていなければならない。それ故、秩序づけられていない選択によって悪をなしてしまうとき、意志においては理性の規則と神の法とが前もって認識（praeintelligere）されていないことになるのである。そして、このようなことの原因として考えられるのが意志の自由（libertas voluntatis）である。[9]

それでは、善と悪とにかかわる我々の性質、美徳（virtus）と悪徳（vitium）に関してはどのように考えられるのであろうか。まず、美徳とは直接的に考えるならそのものの自然本性に即したふさわしい状態（dispositio）にあることである。アリストテレスの言葉によれば、「美徳とは完全なものが有する最善なものへの状態づけである。そして、完全なものとはその自然本性に即して状態づけられているものである。[10]」そしてこのことに従って、美徳とは何らかの善性（bonitas）なのであり、このことにおいて一つ一つのものの善性が成立するのである。それはそのものの自然本性に即したふさわしい状態にあることである。このような美徳が秩序づけられてあるところのものとは善なるはたらき（actus bonus）である。そしてこのような美徳に対立するものが三つある。一つは、美徳がそれに秩序づけられているはたらきに関して対立するものであり、これは罪（peccatum）である。一つは、何らかの善性であるということが美徳の性質（ratio）に伴うということに従って、美徳に対立するものが悪意（malitia）である。そしてもう一つが、美徳の性質に関して直接的に対立するものが悪徳（vitium）である。[11]

美徳と悪徳がこのようなものであるなら、悪徳とはいかなるものにおいても自然本性に適合することに反する状態に基づいて語られるのである。そして、いかなるものの自然本性もそれによってそれが種に割り当てられるところの形相（forma）によって特に決定されるのであり、例えば、人間は理性的魂という形相によってその種に割り当てられるのである。それ故、理性の秩序に反するものは人間である限りの人間の自然本性にも反するのである。理性に従うことこそ人間である限りの人間の自然本性に従うことなのである。人間にとっての善とはまさしく理性に即して存在することであり、人間にとっての悪とは理性に反して存在することである。そして人間の美徳とは人間を善きものとし、彼の業を善へともたらすものである。そして、悪徳とは理性の秩序に反する限りにおいて人間の自然本性に反するもの、人間とその業を悪しきものとするもの

---

[9] ibid.

尚、意志の自由に関しての詳しい考察は別の機会に行う。

[10] Aristoteles, Physica VII, 3. 246b23~4

[11] ST., I-II, q., 71. a.1

なのである。[12]

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しかし、自然本性に即したふさわしい状態とはいかなるものか。姦夫や姦婦の有する好色という状態は人間の自然本性に即していない悪徳なのか。悪徳と呼ばれるものははたして我々を不幸にするものなのか。ここで、18世紀フランスの作家、サドの最初の著作『司祭と臨終の男との対話』[13]に示された正統的キリスト教に対立する思想を比較のために参照してみたい。

生前に犯した過ちと悪徳（vice）について悔いてはいないのかと問う司祭に対して臨終の男は答える。自分は自然によって強い嗜好と情欲（passion）とともにこの世に生を受けた自分はそれらを満たすために生きてきたのだ。それは自然が私に与えた本質的な傾向なのだ。しかし自分は自然の全能を十分に認識せず、自然が私に与えてくれた能力を（司祭にとっては罪悪かもしれないが自分にとっては単純素朴な能力を）、司祭たちの教えるばかげた教義体系に騙され、充分に用いることができなかったことを後悔しているのだ。即ち、司祭にとっては悪徳でしかない情欲はこの男にとっては自然から与えられた聖なる霊感（inspiration）でもある。しかし、司祭はそのような自然を腐敗したもの（corrompue）だという。それに対して臨終の男はなぜ全能の創造主（神）が腐敗した自然など作ったのかと問う。この世界に一体創造主など探す必要があるのか。

自然が与えてくれた快楽への欲望はそれ自体善きものであり我々を幸福に導くものではないのか。それによって姦淫を行ったとしても、それが罪や悪徳と言えるのか。一夫一婦制や姦淫禁止という法こそ盲目の人間が勝手に作り上げた自然に反するものではないのか。創造主などという理解不可能なものに対する信仰などに意味はない。目に見える自然以上に一体何が必要なのか。感覚に由来する明証以外に何が必要なのか。その上に神とその絵空事の教えをでっち上げたところで、何か理解が進むのか。それは我々の精神を錯乱させるだけで、これに光を与えてはくれない。それは我々の自由を妨げるだけである。神についての司祭たちの詭弁は我々の魂に平安を与えるどころか、苛立ちと恐怖を与えるだけである。

われわれの魂はそのままであるがままの自然の意にかなった魂なのである。自然が自らの目的と要求に従って形作ったものである。そして、自然は美徳と悪徳とをひとしく人間に要求する。自然が人間を美徳に向かわせようとするとき、人間は美徳を積む。自然が悪徳を要求するときには、欲望が沸き上がり人間はこれに耽るのである。我々人間の矛盾に、自然の法則以外に他の原因を求めてはならない。また自然の法則には、自然の意志と要求以外にいかなる原理もあり得ない。この世界の一切は必然に基づいていて、一切は正しい秩序に従っている。そこに神の知恵は

---

[12] ST., I-II, q., 71. a.2

[13] *Dialogue eutre un prêtre et un moribond*, Sade, Œuvre I, Michel Delon (éd.), Gallimard,《Pléiade》, 1990, pp.3~11

必要ない。自然の結果には自然の原因しかない。神のごとき反自然的なものを仮定する必要などない。神をいくら説明したところでそれは詭弁（sophisme）にしかならない。神は何の役にも立たず、絵空事（chimère）に過ぎない。

宗教に関して人間がその狂信（fanatisme）と愚劣さ（imbécillité）をどれほど過剰に抱えていることか。ブラーマの不条理、孔子の夢、黒人たちの崇める大蛇、ペルー人の崇める星、モーゼの万軍の神、マホメットの諸教派、キリスト教の異端、いったいどれが好ましいと言えるのか。聖なる贖い主もあらゆる偽善者のうちでも最もありきたりの者、あらゆる詐欺師のうちでもっとも平凡な者である。もし神が存在するとしても、彼は我々を説得するためにイエスが考えたほどに奇妙な方法はとらなかったはずだ。預言も奇跡も殉教者もその証拠になどならない。

善く生きた者（美徳に従って生きた者）には永遠の報償が与えられ、悪しく生きた者（悪徳に従って生きた者）には多くの苦しみが与えられるという教義体系など信ずるわけにはいかない。神の存在など認めない虚無の教義しか信ずることはできない。それは全く恐るべきものではなく、そこには慰めと単純素朴なものしかない。虚無の教義体系以外は皆傲慢の所産であり、それだけが理性の所産である。自然の世界では絶え間ない生産と再生産が繰り返されている。何ものも滅びることもなければ、壊滅することもない。今日人間だったものは明日蛆虫となり、次の火には蠅となる。即ち、あらゆるものは永遠に存在し続けるのである。自分にふさわしくない美徳によって報われたり、自分がその主人でもない罪悪によって罰せられるなどということはあり得ない。全能で最高善としての神が存在するというのなら、そもそもそのような神が人間を罰するために創るはずなどない。

自然が必要としない美徳は一つとしてなく、自然が必要としない悪徳も存在しない。美徳と悪徳、それはエロスとタナトスのような関係にあるのかもしれない。タナトス（悪徳）によって破壊されたものは、またエロス（美徳）によって再生され、かかる完璧な均衡によって自然は維持されてゆくのである。自然が我々を悪徳の側に投げ込んだからと言って、それが我々の罪になるのか。それは我々の皮膚に針を刺しに来るスズメバチの行動以上のものではありえない。

それでも我々が守るべき、理性が我々に教えてくれる唯一の道徳があるとすれば、「他の人を自分がそうなりたいと思うくらい幸福にせよ」という黄金律（règle d'or, Goden Rule）、そして自分が害悪を受けたくないなら、他人に害悪を及ぼすな、ということだけである。我々はこの原理にのみ従うべきである。宗教も神も必要はない。善きこころ（bon cœur）だけで十分である。

宗教など人の手に凶器を持たせるための役にしかたたない。その恐怖の名こそがすべての戦争とすべての天災を併せた以上にこの地上に血を流させたものだ。宗教が教える彼岸のことなど忘れるべきだ。しかし、幸福である悦びとこの世で幸福をつくりだす悦びだけは捨ててはいけない。これこそが自然によって与えられた我々の存在を大きくし拡げてゆく方法なのだ。肉体の快楽（voluptas, volupté）こそ我々にとって最もいとおしいものである。肉体の快楽こそ我々が生涯礼拝し続けるべきものであり、その手の中で我々は一生を終えるべきものである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

18世紀革命前後のフランスに生きたサドにとってキリスト教の教える道徳こそ本来の人間の自然本性に反し、キリスト教道徳から見れば悪徳でしかないような道を踏み外した放蕩者（libertin）としての生き方こそ人間を幸福にするものだった。まさしく自然が与えてくれた肉体の悦楽がわれわれを導き幸福にするものなら、われわれはそれを満たすべきだ。婚姻関係にある夫婦の子作りのため以外の性行為やサドも好んだ男色（同性愛）を人間の自然本性に反するものとして断罪できるのか。[14] トマスの思想を受け継ぐ現代のキリスト教道徳は本当に妥当なものなのか考えてみる必要はあると思われる。美徳の基準とされる自然、徳に人間という存在者にとっての自然本性とは一体どのようなものなのか。これを次の課題としておきたい。

---

[14] 同性愛に関しては、現在WHOの疾病分類IDC-10およびアメリカ精神医学会のDSM-5（精神疾患の診断・統計マニュアル）においては異常、倒錯、精神疾患とは見なされず、治療の対象から外されている。そして同性愛などの性的指向については、矯正しようとするのは間違いであるとする見方が主流である。また、生殖を目的としない性行為を悪徳として断罪するのも、そこでは人間以外の多くの動物の性行為のあり方を自然なものと考える根拠のない基準に基づいている。